

58 発達障害のあるモデル事業利用者に対する小グループ訓練の取り組み

—行事への参加を通してみられた変化に着目して—

理療教育・就労支援部 就労移行支援課 梅本佳奈子 四ノ宮美恵子
小林菜摘 平野友梨

【目的】

発達障害との診断を踏まえて支援を開始したモデル事業による利用者を対象に、「自他の認識を深めること」を目的として、センター内行事（並木祭）への参加体験を通して小グループ訓練を行った。そこで試行したプログラムの内容を報告し、効果について考察する。

【対象と方法】

(1) 対象：発達障害と診断されたモデル事業利用者 A、B、C の 3 名。

(2) 方法

プログラムによる介入の前後と経過の間に見られた自己の気づきと行動の変化をみるために、プログラム実施の前後でアンケートと感想文の記述、個別面接、就職レディネスチェック（モデル事業利用開始時に実施済み）を実施した。

(3) プログラム

行事に向けての小グループ訓練において、全体でひとつの課題に取り組むグループミーティングとグループで集まるが別々の作業をするグループ作業の時間とを設け、支援員が各作業の仕上がりに対してフィードバックを行った。そして、利用者が一人ひとつずつの役割（看板係・広告係・メニュー表係）を担当し、遂行することを課題設定とした。並木祭当日は利用者がレジ係・配膳係・ホール係をローテーションで担当し、模擬店の運営を協力して遂行することを目標とした。

【結果】

2011年8月～2011年10月の約3ヶ月間に60分を1コマとし、計74コマの介入を行った。その結果、個人差はあるものの、他者を意識した自己の気づきと行動の変化がみられた。アンケートからは、『人と話すことへの苦手意識』『他者への関心』の項目で共通して肯定的な変化がみられた。また、「自分以外の利用者の頑張ったところ」についての感想文では、『レジ係をしていたAさん』『チョコケーキを作ったBさん』といった、役割にて他者を表現していた。

【考察】

利用者一人ひとりが明確な役割をもち、他者と協同して行事を成功させるという体験を支援者が意味づけをする。そして、支援者が利用者に対し協同作業の体験に関する評価を行い、理解を促したことで、自他の認識が深まり他者を意識した気づきや行動の変化がみられたのだと思われる。また、他者に対する感想文では、それぞれの役割を述べているにとどまり、その人らしさや性格等について言及している記述はみられなかった。このことから、他者を役割として捉えていたことが窺える。今後は、今回得られた気づきや行動の変化が、長期的に定着していくか、また、異なる環境や場面においても般化するかどうかを検証していく必要があると思われる。